

患者を訪ねる医師

診察室で松本トメさん(88)の胸に聴診器を当てる。心配はないみただね。松本さんは昨年、心臓をきちんと動かすための機械を胸に埋め込んだ。心臓がドク、ドクと一定のリズムを刻んで動く音を聞き、状態を確認する。
栃木県小山市にある「お

おやま城北クリニック院長
おた ひでき
太田 秀樹さん(60)

心も通わせ、最期は自宅で

やま城北クリニック)は、高齢者や障害がある人々を中心に診る診療所だ。診療所というのは、入院する場所がないか、少ない医療施設、1軒回って診る。診療所で

この診療所で診るのは、午前中だけ。午後は看護士、を助手席に乗せて自分で車を運転し、患者の家を1軒、1軒回って診る。診療所で

「変わりありませんか」。声を掛けながら、大谷さん(81)の部屋に入ると、大谷さんは顔をほころばせて出迎えてくれた。看護師

が血圧を測り始める横で、大谷さんの義理の娘のみゆきさん(40)に普段の様子を聞き始める。

往診用のバッグにあるのは、血圧計や聴診器のほか、油性ペンやゼロハンテープ、カメラなど。薬を飲む回数やタイミングといった

大切なことを患者が忘れないように、見やすく書き、よく見える場所にすぐ貼ってもらうため、こんな道具も必要なのだ。

診療所を始める前は、大谷さんの整形外科で責任ある立場にいた。そのときに車いすを使う患者たちが集まって行く海外旅行に付き

添い、生活がどれだけ大変かを知った。

だが、気持ちには変わらなかった。「生活には困らないだろう」とそんな思いで一歩を踏み出した。

診療所を開いたころから、最期は病院ではなく自宅で過ごしたいと願う患者が増え始めていた。国も、住み慣れた生活の場で病気を診てもらい、介護を受けられる体制づくりに乗り出した。世の中に取り残られるようにして、自分と違う1人の医師と2人で始めた診療所は今や3つの診療所となり、複数の介護施設と連携をとるまでになった。

診療所に通ってくる荒井サダさん(82)の夫を、サダさんと共にみとったのは7年前のこと。自宅で最期の治療をする、眠るように思を引き取った。「私のときもよろしく願います」と伝えてあります」とサダさん。

「最期までみてほしい」と言われるのは、自分を全面的に信じてもらっている証し。医師として、なによりもうれしい。その半面、責任も重い。もう遺属、社員なら定年を迎える人もいるが、「ここでやめては患者さんへの裏切りだとも思う。みてもらいたい。そいつってくれる患者がいる限り、訪問し続けようと考えている。」

(編集委員 大谷真幸)



しごと
図鑑

写真 編集委員 葛西宇一郎

大学病院と今の診療所とどこが違うのでしょうか？
大学病院では、心臓の病気が心臓の専門の医者が診るなど、病気がよって担当が細かく分かれていきます。毎日自分の専門の病気の患者さんばかりを診ることになります。でも今は専門以外の病気の人も診ます。高齢になるといくつも悪い所がある人も多いので、全身の状態をみながら治療しています。診療所では患者さんとの会話がより大切になります。だから理科だけで

太田さんからきみへ

はなく、国語や社会の勉強もしておくといいと思います。いろいろな病気を全部わかってしまうのですか？
さすがに全部というわけにはいきません。自分の専門でない病気の患者さんが来た場合は専門の医師に相談することもあります。もっと詳しい検査や診察が必要だったり、大がかりな手術になったりすれば、大きな病院へ紹介することもあります。周囲と協力し合って患者さんに向き合うし、専門外の病気につ

いても勉強しますよ。夜中に患者さんから呼ばれることもあるのですか？
夜の急患は実はそれほど多くはありません。救急車で突然知らない患者さんが運ばれてくる救急病院と違い、うちのような診療所はかかりつけの患者さんばかりで、持病や状態はわかっています。「今晚熱が出るかも」といった事態がある程度、予測できます。患者さんの家族などとその際の対処も先に相談しておきます。